

「個別最適な学び」を実現する社会科学習指導の在り方

ー 中学校第3学年における「単元内自由進度学習」の実践を通して ー

渡辺 直紀
教育方法開発コース

1 テーマ設定の理由

令和5年6月に第4期教育振興基本計画が閣議決定された。その中の「IV. 今後5年間の教育政策の目標と基本施策」において、「確かな学力の育成、幅広い知識と教養・専門的能力・職業実践力の育成」が目標1として掲げられている。そのための基本施策として最初に挙げられている項目は、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」である¹⁾。

昨年度の自身の研究から、思考が関連付けされるような学習過程の工夫や「切実性」の高まる「新たな問題（課題）」があって、初めて効果的に問題（課題）解決的な学習が実現し、子どもの知識の構成が促されることがわかった。一方で、一斉指導ではなく、子ども一人一人の多様性に基づいた「個別最適な学び」を実現するための学習指導の在り方について研究を進めることが課題として残された。これらのことから、今年度の研究では「個別最適な学び」を実現する社会科学習指導の在り方として、中学校第3学年歴史的分野と公民的分野における「単元内自由進度学習」の実践を取り入れた研究を視点1として進めることとした。

また、現任校の校内研究の研究主題は「思考力、判断力、表現力等を高める学習指導の在り方」、副題が「評価からの授業改善を通して」である。特に、研究の視点として①生徒の思考を表出させる工夫、②思考力、判断力、表現力等を高める生徒主体のクラスワーク、③指導と評価の一体化と評価を生かした指導の工夫・改善、の三点を挙げて取り組んでいる。校内研究での研究主題に迫るために、本研究で扱う「単元内自由進度学習」の社会科の実践を複数回授業公開し視点2として設定する。

2 基本的な考え方

(1) 「個別最適な学び」について

「個別最適な学び」の在り方を研究する際に想起されるのが、木下竹次による「奈良の学習法」と、重松鷹泰による「奈良プラン」や富山市立堀川小学校での実践である。

木下竹次は「各児童は各自の個性を基礎とし、自分の環境に依拠して種々の経験を積み、工夫創作を為し、よかれ悪しかれ、自分でなくては辿ることのできない道を辿って、人間固有の本性を发扬し社会に貢献していく。もはや今日においては多くの人はかくのごとき自律的学習が他律的教育に優っていることを認めている。」と述べている²⁾。

かつて重松鷹泰が指導し、児童中心主義の学習指導の研究を今も続けている富山市立堀川小学校は、1959年に『授業の研究』という実践研究の書籍を発行している。そのはしがきには、「学習指導は、まず、子どもの考え方の特質を認め、その言い分をすなおにききいれることからはじめなければならない。」という堀川小学校の理念が示されている³⁾。堀川小学校では、学びの姿や到達点が子どもによって異なることを認め、一人一人の個性を活かした学習を進めることで、現在において

も「個別最適な学び」を実現しようとしている。これらを踏まえ、本研究で目指す「個別最適な学び」の学習の姿は、「ひとり学習」から「集団学習」を経て、さらに「ひとり学習」へと戻るような学びの形であると定義づける。さらに、「ひとり学習」の場面で、子ども自身が学習目標を設定し、自分に合った学習方法を選択する学習過程を想定すると、このような実践は「単元内自由進度学習」で実現できるのではないかと考えた。

②「単元内自由進度学習」について

奈須正裕は「個別最適な学び」の重要な要素として、「①一人ひとりに応じた多様な教材・学習時間・方法等の柔軟な提供」，「②自分に最適な学びを自力で計画・実行できる子どもの育成」の二つを挙げている⁴⁾。これらの要素を実現する学習方法として、「一つの単元をどう学ぶかの計画と実施をまるごと子どもに委ねる学習」である「単元内自由進度学習」を挙げている⁵⁾。

伊藤崇達⁶⁾は自己調整学習における学習過程を「予見の段階」，「遂行コントロールの段階」，「自己省察の段階」の3段階に分けて述べ、「予見の段階」について、「学習者は、何らかの目標をもっており、(中略)ここで、どのように学習を進めていくかについて計画が立てられる」としている。また、「遂行コントロールの段階」は、「学習や動機づけに影響を与える学習方略が実行される」段階である。「自己省察の段階」では、

「学習者は、自己評価という重要なプロセスに携わるようになる。自分の学習成果が基準をどのくらい満たしたかについて自己評価をし、(中略)方略に問題があれば、修正がなされる」段階である。最後の「自己省察の段階」の結果は、次の「予見の段階」に反映され、循環的なプロセスとして成立していく⁶⁾。

また、先行研究として「単元内自由進度学習」を取り入れた社会科学習指導の在り方を研究した、福岡市立金武中学校の中村達矢の研究を参考に、本研究では図1のような1単位時間の学習過程を計画した⁷⁾。

「単元内自由進度学習」は、一単位時間の目標や学習の進め方、課題にかける時間の長短を子どもがそれぞれ考えながら学習を進める教育方法である。そこで本研究では、年間を通して「単元内自由進度学習」を取り入れた授業を進めることで、子どもを取り巻く環境で差が生まれやすいとされる「学びに向かう力」や「思考力・判断力・表現力等」が育成されるかどうかを追究していく。

3 視点1における実践の概要と考察

視点1として「個別最適な学び」を実現する社会科学習指導の在り方について、中学校第3学年歴史的分野と公民的分野における「単元内自由進度学習」の実践に年間を通して取り組んだ。年度当初に「日清・日露戦争と近代産業」の単元において、なぜ「単元内自由進度学習」を取り入れるのかについてオリエンテーションを行い、学習の進め方について共通理解を図った。

まず、単元の導入で「なぜ日本の国際的地位は向上したのだろうか。」という「単元を貫く学習課

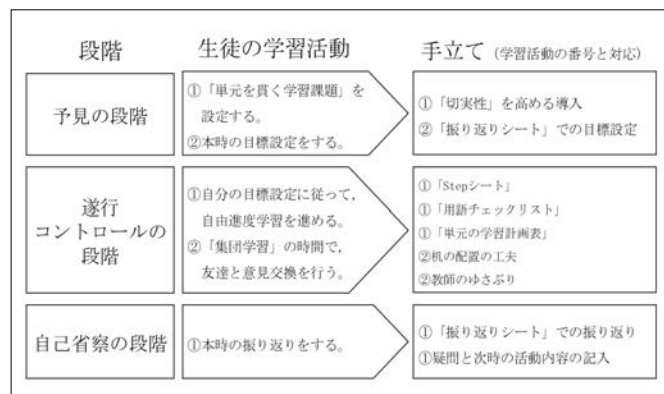


図1 本研究における1単位時間の学習過程

題」を設定した。「単元を貫く学習課題」に対し、「ひとり学習」での個人での学習の後、「集団学習」では多くの生徒が同じ進度の友達や、先に進んでいる友達と相談しながら学習を進めている様子が見られた。多くの生徒は教科書を見ながら学習を進めていたが、わかりづらい内容についてはインターネットの資料を調べたり、動画を見たりと、学習内容に軽重を付けている様子が見られた。また、まずは紙のノートに教科書の内容をまとめてから、ロイロノート上の「Step シート」を進める生徒や、ロイロノート上でスライドを作成して自分で学習内容をまとめる生徒など、それぞれの生徒が自分に合った学習方法を選択していた。

授業終了後の生徒アンケートの結果、88%の生徒はこれまでの「ワークシート学習」（1 単位時間にワークシートを使って 1 つの学習課題を解決する学習）より、「単元内自由進度学習」の方が自分に合っていると回答した。その理由の記述を見ると、「ワークシート学習はただ（空欄を）うめるだけで考えることがあまりなかったが、今回は考えて自分で取り組む機会が増えたから。」「ワークシート学習は課題が決まっているためすぐに終わってしまうこともあるが、自由進度学習は自分で課題を決められるため時間いっぱい学ぶことができるから。」などの意見が見られた。

9 月には「現代社会の見方・考え方」の単元の授業を行った。これまで生徒たちは 1 学期間を通して「単元内自由進度学習」に取り組んできており、徐々にこの教育方法にも慣れてきたところである。本単元では単元内に「パフォーマンス課題」を取り入れることで、「協働的な学び」を促し、獲得した知識を活用することでさらに深く理解する学習を目指した。「パフォーマンス課題」について、西岡加名恵は「リアルな文脈の中で知識やスキルを応用・総合しつつ使いこなすことを求めるような課題」だと述べている⁸⁾。これまで行ってきた筆記テストや実技テストとは異なり、生徒はある状況設定について、既習事項などを用いて自分の考えを表現する課題が「パフォーマンス課題」である。「パフォーマンス課題」として修学旅行に関する課題を設定し、生徒は「ひとり学習」から小グループでの「集団学習」、最後にまた「ひとり学習」で考えをまとめた。ある生徒は「効率や公正をすべて取り入れて解決策を考えるのは難しいので、対立が生まれたときにはお互い話し合って譲り合って、一番いい解決策を導く必要がある。今後の学校生活でも必ず対立は生まれると思うので、その時に今回やった学習の内容を生かして、解決に導いていきたいと思った。」などと振り返りに記述した。このように、「パフォーマンス課題」の実践を通して「協働的な学び」が促進され、「ひとり学習」に終始しがちであった「個別最適な学び」が、学んだ知識を「活用」する学習となったと言える。

12 月は「市場経済の仕組みと金融」の単元において、「固有名詞で綴る振り返り」を取り入れた実践を行った。「固有名詞で綴る振り返り」の実践は、大阪教育大学と附属池田小学校の森本和寿・池住祐亮によって実践された。森本らは、『振り返り』にクラスメイトの氏名を『固有名詞』として書き、クラスメイトの発言を『振り返り』に含めることが契機となって、『振り返り』が他者との応答関係のなかに投じられる」と述べている⁹⁾。クラスメイトの氏名を「方法の振り返り」に記述することで、生徒の振り返りの内容がより具体的となった。生徒の「方法の振り返り」を見ると、「▽▽さんに、独占と寡占の例を使って分かりやすく教えてもらった。そこから、みんなで独占だと 1 つが終わったらその会社は終わってしまうから、そこがデメリットだと話し合えた。」「□□さんは、二つのグラフを見比べて、均衡価格の変化を分かるようにしていた。私も、二つのグラフの変化を見て、何がどう変わったのかぐちゃぐちゃになりそうなので、しっかり理解しながらやりた

い。」などといった振り返りが多く見られた。このように、「固有名詞で綴る振り返り」を取り入れることで、「方法の振り返り」に「これからどのように学んでいけばよいのか」、「他者と比較して自分の学びはどうであったか」といった視点が加わり、次の学びへとつなげる力を高めることができたと考えられる。

4 視点2における実践の概要と考察

本研究を実施するに当たり、「単元内自由進度学習」を取り入れた社会科の公開授業を7回実施した。その都度指導案を作成し、「単元内自由進度学習」の取り組みだけではなく、「パフォーマンス課題」の設定などの手立てについても現任教員から意見を募った。

授業後の研究協議の中で、現任教員からは「課題の設定から生徒が主体的に取り組めるようになっていたり、思考を表出するための手立てがあったりと、とても参考になりました。自分の教科だったらという視点で考えることができ、今後に生かしていきたいと思います。」などの感想や意見があった。公開後に部分的に「単元内自由進度学習」を取り入れたり、生徒の思考を表出させる工夫として「パフォーマンス課題」を実施したりする教員が見られた。

5 成果と課題

「単元内自由進度学習」を取り入れた「個別最適な学び」を実現することで、自ら学習調整を行い、次の学びへとつなげる力や、事象を相互に関連付けることで、筋道を立てて自分の考えを説明する力が育成されることが分かった。

一方で、「単元内自由進度学習」における一番の課題は、それぞれの進度が異なることで、学級全体での話し合い（クラスワーク）の質を担保しづらいことである。これまでの一斉授業では「個人の課題意識」を「学級全体への課題（問題）」として「学習課題（学習問題）」を設定することを重視してきた。「単元内自由進度学習」を進める上で「個人の課題意識」を「学級全体への課題（問題）」とするためには、どのような取り組みが必要かについて今後も研究を続ける必要がある。

注

- 1) 文部科学省「教育振興基本計画」2023, p. 36.
- 2) 木下竹次『学習原論』（明治図書, 1972）, p. 16.
- 3) 富山市立堀川小学校『授業の研究』（明治図書, 1959）, p. 3.
- 4) 奈須正裕『個別最適な学びの足場を組む』（教育開発研究所, 2022）, p. 186.
- 5) 同書 p. 199.
- 6) 伊藤崇達『自己調整学習の成立過程』（北大路書房, 2009）, pp. 3-5.
- 7) 中村達矢『主体的に学び続ける生徒を育てる学習指導』（福岡市教育センター研究報告書, 2022）, p. 4.
- 8) 西岡加名恵『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』（明治図書, 2008）, p. 14.
- 9) 森本和寿・池住祐亮「児童の自己評価を育てる『振り返り』指導 『大阪教育大学紀要 総合教育科学』第72巻」, 2024, p. 383.